

[論 文]

美術専攻学生と音楽専攻学生における“競争”に対する印象の違い

The difference in an impression to “competition” in a art speciality student and a music speciality student.

関 口 洋 美

Sekiguchi Hiromi

目 的

教員は授業を通して様々な学生に接する。接する年数が積み重なってくると、学生たちは、その専攻、入学年度によってそれぞれ独特の雰囲気を感じているように感じる。特に、専攻による学生の雰囲気の違いはある程度一貫しており、おそらく心理的な説明が可能であろうと考えられる。本学には、美術科、音楽科、国際文化学科、情報コミュニケーション学科の4学科が設置されているが、中でも美術科、音楽科においては、所属学生の一貫した特性が感じられる。

このような点に着目した研究はいくつか見受けられる。仲谷(1993)は、京都市立芸術大学および東京藝術大学の美術専攻の学生を対象に、Y-G性格検査を用いて調査を行った。その結果、両学生のパーソナリティに共通する特徴として、「神経質」で「主観的」、「のんき」で「社会的外交性」が強いことを明らかにした。

また、本学においても高橋(1982)は、美術科・音楽科の学生に対して、家庭でのテレビ視聴などの影響を探るべく、家庭環境と性格形成について調査を行っている。当時の学生においては、美術科の学生の方が音楽科の学生よりも、抑うつ性、主観性、攻撃性が高い傾向にあるという結果を得ている。

このように、パーソナリティ全体を見渡した観の研究はいくつか見られる。しかし、本研究ではパーソナリティのうちの一側面に着目し、質的な研究として美術科専攻・音楽科専攻の学生の違いを明らかにしていきたい。そこで、筆者は10年来着目している競争心を取り上げることとした。その理由として、美術専攻の学生はいかに個性を発揮するか、自らの中から創造性を生み出していくかを強いられる環境にあるといえる。一方、音楽専攻の学生は、他者よりも上手く、魅力的な演奏をするかを競わされる環境にある。つまり、両専攻における日常の競争の在り方は質が異なるものと考えられる。よって、環境の違いから両学生の競争の印象にも違いがあるものと考えられる。そこで本研究では、美術専攻学生と音楽専攻学生における競争に対する印象の違いを明らかにすることを目的とする。

なお、本研究では少人数の協力者から、より詳細な印象を調べるため、PAC分析を用いることとする。ここで、PAC分析とは、内藤(1997)が開発した“ある対象”に対す

る印象の構造を分析する手法であり、自由連想、連想された語に対する類似度評定、類似度評定をもとにクラスター分析を行った結果（デンドログラム）の解釈に対するインタビューによって成り立っている。PAC分析の結果を用いて、それぞれの学科に共通する競争に対しての印象について分析していく。

方 法

実施日：美術専攻学生においては、2010年8月10日に行った。音楽専攻学生においては、2011年1月21日に実施した。

実施場所：両日とも、筆者の研究室においてPAC分析を行った。美術専攻学生の際は、Mさん（男性）、Kさん（女性）の順で続けて実施した。音楽専攻学生の際はSさん（女性）、Hさん（女性）の順で実施した。いずれも、実施者は筆者である。

手続き1「連想語の抽出」：まず、4.5cm×7.5cmの右上に番号を付した付箋を渡し、次のように教示を行った。「美術（音楽）専攻として、または個人としてでも構わないので、「競争」と聞いて思いつくこと、感じること、印象などを、単語でも文章でもそのほか絵でもよいので、思いつくままに1つずつこの用紙に書いていってください」。その際に、カードは20枚用意しているが、思いつかなくなったら終了してよいことを告げた。

手続き2「類似度評定」：土田（2009）による、PAC分析のアシストシステムソフトを用いて類似度評定を行った。連想語入力には筆者が行い、語が対に表示される画面まで提示して、「ここにあなたが連想した単語がランダムな順番で2つずつ出てきます。どれくらい似ているかを、あなたの主観で評定してください」と教示し、システムの操作方法を説明した。類似度評定が済んだあとは、クラスター分析にかけ、デンドログラムを作成した。画面を示すと同時に、書き込みが可能なように、連想のときに用いた付箋を用いて、A3の用紙にデンドログラムを書き写した。

手続き3「インタビュー」：デンドログラムの結果を見ながら、クラスターの別れ方についての解釈や、クラスターの内容の意味、クラスター間の差や類似点などをインタビューした。インタビューの際には、協力者に承諾を得たうえで、記録のためにボイスレコーダーで録音を行った。

結 果

美術科学生の結果

Mさんの結果

連想語の結果

連想語は10語であった。この10語を連想するのに要した時間は11分32秒である。連想語は、連想された順に、「美術←他人との勝負ではない」「競走したくない、勝ち負けで判断できない」「でも、勝負論として負けたくないと思う」「美術科としての勝負←できるだ

けいいものを早く作りたいという気持ち」「むしろ他人の感覚はあてに出来ない」「美術は多くの人とのディスカッションで成り立つ←競走があてはまらない」「賞の優劣より価値観や経験で勝りたい」「つまり、多くを見聞きすることが私の中の競走」「作品作りは強制されることがないため、怠ける自身との競走、勝負だと思う」「いかに違う分野から知識や情報を取り込んで自分の製作に飛び火させるか」であった。

クラスター分析およびインタビューの結果

類似度評定を用いたクラスター分析の結果は、2つのクラスターに分かれた。第1クラスターは上部5語、第2クラスターは下部5語で構成された。インタビューの結果、第1クラスターは「自分との競争」、第2クラスターは「他人との競争の意識」と命名された。なお、インタビューの詳細については付録として付した。以下の3名についても同様である。

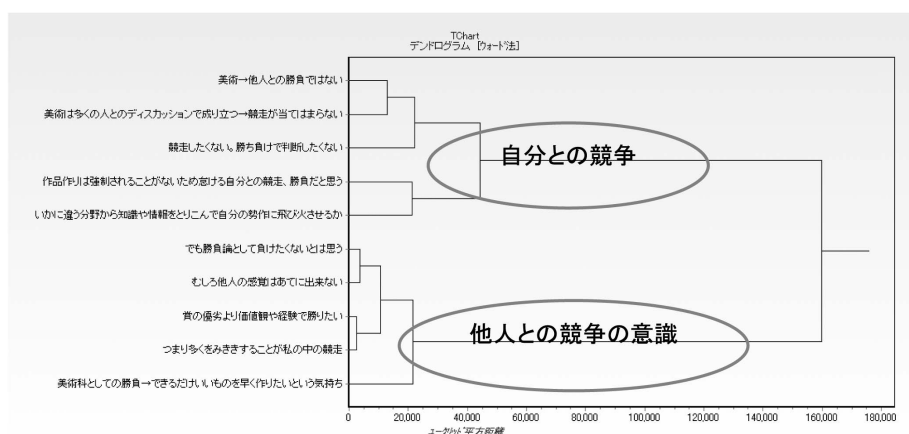


図1：Mさんのクラスター分析の結果

Kさんの結果

連想語の結果

連想語は8語であった。連想に要した時間は16分37秒と、少し時間がかかった。連想語は、連想順に、「作品を作る上での向上心」「自分への新しい刺激」「今の実力」「相手と比べられてしまう」「楽しむもの」「考え方の違いが目に見えて分かる」「運」「賞とかで上に行く人として評価されてしまう」であった。

クラスター分析とインタビューの結果

連想語の類似度評定によるクラスター分析の結果は、大きく2つのクラスターに分かれた。ただし、第1クラスターはさらに上部2語と下部2語とで小さなクラスターを形成しているため、上部を第1クラスター、下部を第2クラスター、その下のクラスターを第3クラスターとした。インタビューの結果、第1クラスターは「自分1人、自分の中で」、第2クラスターは「知り合い同士の相手が見える競争」、第3クラスターは「相手が見えない競争」となった。

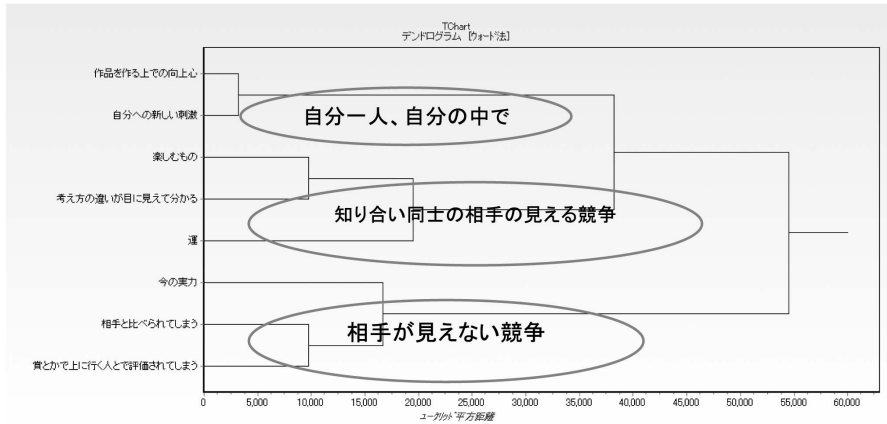


図2：Kさんのクラスター分析の結果

音楽科学生
Sさんの結果
連想語の結果

連想語は、11項目で6分46秒という比較的短い時間で連想された。連想語は、連想された順に、「闘争心」「緊張」「気合い」「楽しみ」「不安」「喜び」「後悔」「挫折した後のやる気」「きびしい」「個性」「一瞬で終わる」であった。

クラスター分析とインタビューの結果

類似度評定によるクラスター分析の結果、2つのクラスターに分類された。第1クラスターは6項目、第2クラスターは5項目からなっていた。インタビューの結果、第1クラスターは「練習量、競争の準備」、第2クラスターは「オーディション時の持って生まれたものを感じる」となった。

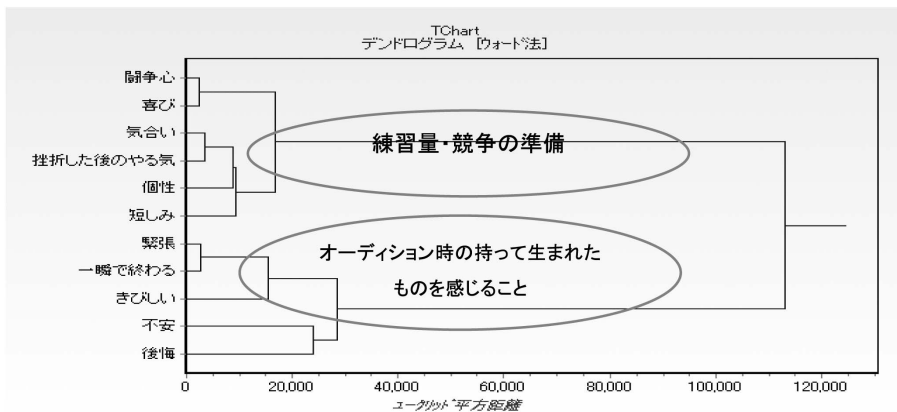


図3：Sさんのクラスター分析の結果

Hさんの結果

連想語の結果

連想語は10項目であり、連想には8分41秒かかった。連想語は連想順に、「向上心」「負けず嫌いの人ががんばる」「ライバル」「やる気が出る」「自分との比較」「順位をつける」「一生懸命さが増す」「コンクール」「周囲の人に認められたい」「本番でプレッシャーが増す」であった。

クラスター分析とインタビューの結果

連想語の類似度評定によるクラスター分析の結果、3つのクラスターが得られた。第1クラスターは3項目、第2クラスターは4項目、第3クラスターは3項目からなっていた。インタビューの結果、第1クラスターは「競争の前、本番への準備」、第2クラスターは「競争している最中、本番」、第3クラスターは「競争後に感じる事、他者の目」となった。

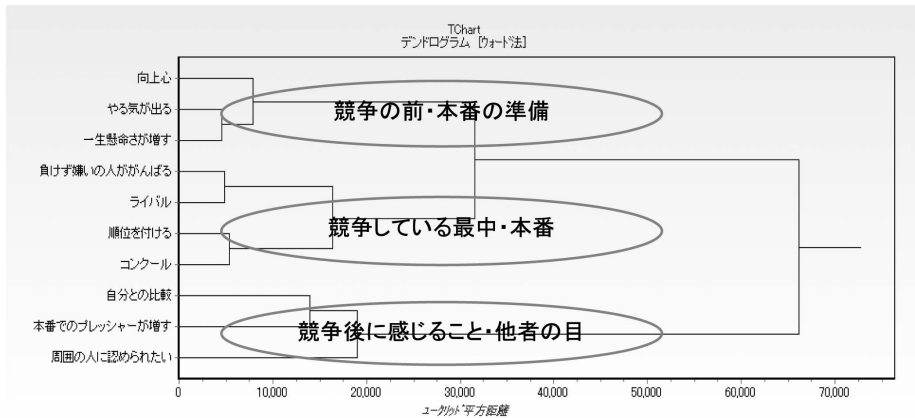


図4：Hさんのクラスター分析の結果

考 察

各専攻2名ずつの調査であったが、各専攻での特徴が得られた。美術専攻学生では、ともに「自分の中の競争」と「他者との競争」のクラスターが現れた。これは、問題の部分で述べたとおり、美術専攻学生においては、個性や独創性という意識が、自分のなかでの競争として現れたものと考えられる。特に、本研究において協力してくれた学生は、高校時代にすでに美術を専攻していたためそのような印象が明確に表れたものと考えられる。一方、音楽専攻学生からは、あくまで他者との競争を前提としたうえで、競争における時系列的なクラスターが現れた。音楽科ではオーディションや試験などが多いため、相手がある競争が前提になったものと考えられる。また、時系列のうち競争の前はポジティ

ブな印象、競争の後はネガティブな印象であるという点も2人に共通していた。コンクールや試験に合わせて練習することはよいことであり、入賞や高得点を目指して頑張ることはポジティブな感情を想起させるものと思われる。しかし、いざ本番を迎え思わしくない結果を得ることになれば気持ちが落ち込むのは当然かもしれない。

本研究は、少ない被験者ではあったが、それぞれの専攻に共通する「競争」に対する印象の傾向を見出すことができた。今後の課題としては、さらに被験者を増やし、学科における共通点や個人における相違点などを明らかにしていくことが考えられる。

文 献

- 高橋正臣 1982 人格形成を規定する要因分析 (IV) : 家庭における文化的環境要因の變化が性格形成に及ぼす影響について 大分県立芸術文化短期大学研究紀要 19 1-13
- 内藤哲雄 2002 P A C分析実施入門 [改訂版] — 「個」を科学する新技法への招待— ナカニシヤ出版
- 仲谷洋平 1993 美術学生のパーソナリティに関する研究 日本教育心理学科総会発表論文集 35 33
- 土田義郎 「P A C分析支援ツール」
wwwr.kanazawa-it.ac.jp/~tsuchida/lecture/pac-assist.htm

付 録

Mさんのインタビュー結果（敬称略）

関口：クラスター分析の結果、上の5つと下の5つに分かれるということですよね？

M：2つに分かれています。

関口：上の5つを第1クラスター、下の5つを第2クラスターとしますね。では、上の5つの第1クラスターはどのようなグループだと思いますか？

M：美術って、自分の中のものというものが大きくて、他者との競争というよりは、自分との競争という、そういうたぶん考えだと思います。

関口：他に思い浮かぶことはありますか？

M：うーん。

関口：では、下の方を聞いてみましょうか？下の方の5つのグループは、どんなことだと思いますか？

M：上のほうで自分との競争ということに対して、下の方は、他者との競争に意識という感じだと思います。

関口：では、他者との競争の意識という感じかな？

M：そうですね。

関口：では、第1クラスターと第2クラスターとの違いは何だと思いますか？

M：重きを自分においているか、他人においているかの違いだと思います。

関口：特に上の方では、自分との競争とのどういうところが強調されていると思いますか？

M：展覧会など賞の優劣というよりは、経験による。

関口：自分の経験ということかな？

M：自分の経験によるところが大きいということから見て、他人と比べることよりも、如何に自分の経験を多く取り込めるかということだと思います。

関口：たとえば自分との競争といったときに、自分に負けないということもあるし、自分の満足度ということもあるし、自分の燃え尽き度ってということもあると思うんだけど、M君にとって自分との競争ってどこが一番強調されているのかな？

M：常に刺激を受け続けていないと、僕はあんまり長いスパンで制作しつづけていられるわけではないので、できるだけ制作している間も、美術以外のことから刺激を受け続けたいという気持ちがあって。

関口：刺激を受け続けるってことが、自分との競争の一番のポイントってことかな？

M：自分から刺激を受けに行くってことです。

関口：刺激を受けに行くってことですね。では、下のほうはどうですか？他人との競争の意識ですが、どういうところが、特に他者との競争で、ここだけは劣りたくないとかありますか？

M：単に技術でも劣りたくないですし、作品に見える視野の狭さというか、人と比べるときに、他の人の作品を見ても、もっといろんなものを見てもっと自分の作品を発展させればいいのにと思うので。自分にも足りないものだと思うので。

関口：じゃあ、こっちももっと刺激を受けてということになるのかな？

M：でも、まあ、その自分のモチベーションを高めるという意味でも、相手を競争の対象にしているという感じですかね。

関口：自分のモチベーションを高めるということですね。では、上と下の共通点は何だと思えますか？

M：何事も制作するというのも、自分の経験がもとになっているものだと思うので、それを深めていくという点で、もっといろいろな経験をしたいという感じです。

関口：いろんな経験をしたいということですね。では、何か今回、気付いたことはありますか？

M：普段から意識はしているんですが、自分の考えにまとまりがないと感じた。他人との勝負ではないと出しておきながら、そうでないのが出たり、という感じがしました。

Kさんのインタビュー結果（敬称略）

関口：Kさんの結果をみると、上の2つを第1クラスター、次の3つが第2クラスター、最後の3つ第3クラスターということでもいいですか？

K：はい。

関口：では、第1クラスターの2つの共通点はなにでしょう？ どういうグループだと思いますか？

K：どちらも、どっちかという自分一人です。

関口：自分一人がキーワードですか？

K：自分の中でとことがあると思います。

関口：では、2つめはどういう感じですか？

K：第2と第3の境界が微妙なんですけど、第2は、人がいるんですけど、それまで多くないというか。

関口：相手が少ないってこと？

K：そうですね。

関口：この「運」が入っているんだけど、どういうことかな？

K：思いつかない中で、経験でもいいということだったので、経験で、展覧会などに出すときに、展覧会に出すっていうと競争みたいところがあるので。美術の展覧会だと、出す展覧会によって、好い成績だったりそうでなかったりするので。

関口：運は他者の人数が少ない方にはいってますよね？では小さい展覧会ってことですか？

K：展覧会に出すのは自分で決めて出すので、第2は友人の中でのということが多くて、友だち同士で、この展覧会に出してみようかみたいな感じなので。

関口：なるほど、お友達同士のコミュニティということですね。では第3はどうですか？

K：これは、まあ、展覧会などに出した時のことを仮定したときに出た言葉なんですけど、これどっちかという、相手が見えないですよ。

関口：なるほど。相手が見えない競争ってことですね。

K：なんか、気付いたら勝手に、みたいな。

関口：えで、第1と第2は明らかに自分と他者が入ってくるという違いですかね？

K：はい。

関口：第2と第3の違いは、相手が見えるか見えないかですかね？

K：はい。

関口：では1と3の違いはなんですか？

K：かなりかけ離れてます。

関口：1と3はかなりかけ離れていると。では、第2と第3は相手が見える見えないの違いなんだけれども、ともに相手がいるということですよね。でも、第1と第2は最終的に同じクラスターになっていますよね？これは、どういうことだと思いますか？Kさんの主観で、どんな感じがしますか？

K：第1は自分なので、自分に来る刺激というか、競争心というか、こうしなきゃという意識で、第2は相手が近い分、目に見えてわかるというか。自分は、自分の出すものなのでどうしても自分が見えるじゃないですか？相手は、相手が近くにいる分、ある意味自分に近いところで、その差というか、みられる部分があるので、自分が気にしてしまう度合みたいなことが近いので、くつつくのかなと。

関口：自分を良く見れるということですか？

K：はい。

関口：では第3クラスターは、自分よりも距離がある感じなのかな？客観的な評価みたいな感じなのかな？どう思いますか？

K：第3は、他人に決められたというか、言われたことなので、あんまり意識としてはないのかな？

関口：他人に言われたことだから、自分の意識とは違うということ？

K：自分の意識とは違う、ところにあるのかなと。

関口：自分が出してみた言葉で、このような結果になってみて、何か気付いたことはありますか？

K：こんなに出ないものかなと思いました。結構、競争とか相手と比べられるたりしてということを意識していると思っていたので。

関口：意外にでてこなかった？

K：意外と他人の目を気にしてしまうというか、特に美術だと賞を取って上に行かなくてはいけないのかなとか思っていたので。

Sさんのインタビュー結果（敬称略）

関口：上の6つのグループと、下の5つのグループに分かれると思うんですが、それでいいですか？

S：はい。

関口：では上を第1クラスター、下を第2クラスターと呼びます。まず、上の第1クラスターは、どのようなグループだと思いますか？

S：えー、自信？

関口：この6つに共通する経験などはありますか？

S：練習量とかそういう感じですかね？

関口：では、競争するための準備などと関連している感じですか？

S：あとは経験とか。

関口：経験。では、下の方を見てみましょう。こちらはどんなグループですか？

S：自分の思っている・・・、何かな。何か持って生まれたもの？

関口：才能みたいな感じ？

S：才能というわけではないんですけど、気が弱いところがあるので。

関口：なんとなく、ある場面が浮かびそうな気がするんですけど、どうですか？

S：ある場面？

関口：たとえば、試験とか、オーディションみたいな場面に共通するのかなと思うんですけど。

S：オーディションですね。

関口：オーディションの時に、自分の持って生まれたものを感じるっていう感じ？

S：ありますね。思わないようにするんですけど。やっぱり、そこを強くいけないですね。

関口：その辺、不安みたいなことなのかな？上と下を対比させて考えると、下の方は、たとえばオーディションとかの本番ということとすると、上はその準備ということになるのかな？

S：そうですね。

関口：オーディションという言葉は出てこなかったけれど、Sさんにとっては、競争というのと、オーディションが頭に浮かぶってことがあるのかな？

S：あります。

関口：では、上のグループと下のグループで似ているところと違いところを聞かせてください。

S：違うところは、こっちは（上）は自信、プラス思考なんですけど、こっち（下）はマイナスになってしまう。

関口：上はプラスの思考、下はマイナスの思考ということですかね？似ているところはどこですか？

S：オーディションを受けるために、全ての点が出てくるんです。オーディション前はプラスなんですけど、本番になるとマイナスになってしまう。

関口：うーん、ではオーディションが共通ということですね。そのほかに何か気がついたことはありますか？

S：気がついたこと？

関口：自分はこんな風に思ってたんだ見たいなことありますか？

S：でももう、パニックですよ。楽しみもあれば、不安もあれば、緊張もして、でも負けたくないというプライドもあるし。

関口：すごく複雑な思いがでてくるのかな？

S：すっごくプライド高くなって。

関口：でも、音楽ってそうでないとやっていけないこともあるでしょう？

S：私、前はそんなことなかったんですけど、音楽を始めてから闘争心みたいなことが出てきたみたいな。

関口：じゃあ、音楽を始めて、誰かと競い合うってことを経験していく中で出てきたのかな？

S：以前は、語学に興味があって、音楽を始めたときも、楽しいなあ、楽しければいいかなと思っていたんですけど、最近オーディションとかを受けるようになって、負けたくないと思うようになりました。

Hさんのインタビュー結果（敬称略）

関口：上の3つ、その次の4つ、下の3つで共通するものは何か教えて下さい。まずは、一番上はどうですか？

H：自分の心の中でふつふつと沸くもの。

関口：それは意欲みたいなことかな？

H：心の状態。心が思うこと。

関口：これは、競争をしているときかな？前かな、後かな？

H：競争の前。

関口：では、2番目はどうですか？

H：競争そのもの。競争している最中、本番。

関口：では一番下は？

H：状態。本番での状態。本番、することで感じることだったり、思うことだったり、進行形というか。

関口：一番上は、競争前の状態という、どんなことをしているということが想定されますか？

H：本番前の準備。

関口：練習とかということですか？

H：はい。

関口：では、2番目はどうですか？ほかのグループと違うこととか。

H：状態でなくて、目的・・・、うーん。

関口：目標？

H：目標！

関口：競争の結果に対する目標ってことかな？

H：はい。

関口：改めて、3番目はどうですか？

H：そのときだけじゃなくて、本場をしている間ずっと感じることもとか、終わってからも感じることもかな。

関口：「自分との比較」と「周囲の人から認められたい」が一緒になっているんだけど、

このへんはどういうくりなのかな？

H：本番で自分と違う人がやっているのを比べたりとか、それは周囲の人が見てもそう思うのかなとか、周囲の人にもそういう風に映っているのかなとか、私はここができるとかかな・・・周囲の人というか、審査員かな。

関口：自分との比較というのは、他の人と自分を比較するということ？自分と自分を比較するんじゃないくて？

H：はい。

関口：そうか、他の人の目ってことですね？

H：はい。

関口：では、1番目と2番目の共通点は何ですか？

H：前向き、上に向かっていく感じです。

関口：では違うところは？

H：時制かな。

関口：競争前と競争の最中と。では、2と3では？

H：似ているところは？

関口：他の人に対する意識とかかな？

H：私もそう思いました。

関口：では違うところは？

H：2はそれ自体で、3はそれについての補足的な？

関口：もっと外枠的なことですね。2のほうがより競争の核心に近くて、3は周辺ということですね。では1と3はどうですか？

H：共通することは、心で思うこと。それ自体ではなく、こうしたいとか、頑張りたいとか。

関口：違うところは？

H：時制かな。あとは、自分主体か他人主体か。

関口：では、1、2、3を見て、自分にとってプラスかマイナスか見てみてどうですか？

H：1はプラス、2はプラスマイナス0、3は長いスパンでみるとプラスだけど、その時点ではマイナスかな。

関口：他に何か感じることとかありますか？

H：1と3は近いけど、2だけが違う。2があることで、1と3が生まれる感じがする。